

ハーディの西への旅 —— 亡き妻へのエレジーを中心に ——

竹 永 雄 二

(英米文学研究室)

はじめに

ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928) は出版された詩集のそれぞれの前書きの中で、彼の詩はすべて「劇的独白」(dramatic monologue)であることを一貫して力説している。¹⁾ この主張は彼の詩が、彼の小説と同じように作家自身とは切り放された客観的な視点から、人生の様々な諸相を立体的に構築しようとしたことを表しているように思える。確かにこの劇的独白がハーディの900を越える叙情詩の手法上の大きな特色となっているのは事実である。Wessex という古代の呼称がつけられたドーチェスター (Dorchester) という郷土色の強い風土を背景に、人生の卓越した観察者によって味わい深い珠玉の短詩が次々と作り出されている。しかし例外はある。その例外の筆頭に来るのがハーディが亡き妻エマ (Emma Lavinia Gifford) を追慕して書いたと言われる一連のエレジーであろう。それらの詩にはハーディ自身の悲痛が耐え難いほどに溢れている。皮肉なことに、彼の意図に反して、彼自身の情感溢れるこれらの詩が芸術的に高い評価を受け、彼を第一級の詩人として位置付ける役割をしている。²⁾ これらの詩はすでに語り尽くされたとも言えるかもしれないが、ハーディの詩について初めて論考してみようと思う筆者にとっては、これらの詩を取り上げるのが彼の詩的世界へ入っていく確実な道のように思える。ゆえに小論ではハーディが亡き妻を追慕して書いた詩を中心に論考してみたい。

ハーディの詩を幾らか読んで気がつくことの一つとして、旅の設定のもとに書かれた詩が非常に多いということである。そしてその旅の目的地がしばしば「西」という言葉を使って表されている。思いつくまま幾らかその例をあげてみよう。

She opened the door of the West to me, ('She Opened the Door')

Yes, I have had dreams of that place in the West, ('A Dream or No')

Till it catch the Sound
Of that western sea ('I Found Her Out There')

Restore it to the living brow

By bearing down the western road ('On a Discovered Curl of Hair')

You were she who abode

By those red-veined rocks far West ('Beeny Cliff')

A very West-of-Wessex girl, ('The West-of-Wessex Girl')

幾らか参考文献を参照してみると、この西が特定の地域を指していることが分かってくる。ハーディとエマが最初に出会った Cornwall, Saint Juliot, 彼らが二人でよく出かけた Beeny Cliff などの大西洋に面した Cornwall 北岸の地域、エマの出生の地であり彼女が少女時代を過ごした港町 Plymouth 等である。しかしこれらの地域がハーディが住んでいた Wessex (この地名もまた西と深く関連している) よりさらに西の方にあるからという地理的事実だけではまだ納得できないものがある。西という言葉は特に制約された詩の中で使われると、特別な象徴的意味を持つてくる。一般的には死や終わり、衰退の象徴であると思われる。ハーディの西という言葉の象徴も一般的なこのような象徴的意味に解釈して間違いはないと思われるが、もう少し厳密に言えば過去という言葉が相応しいように思われる。さらにこの地域がアーサー王伝説の地であったことと関連させれば魔法、魔術、神秘等の意味も含まれていると考えられる。さらに重要だと思われるのはハーディの年齢である。妻が急死した時彼は72歳であった。その翌年彼は亡き妻を追慕して43年ぶりにコーンウォールを再訪している。当然ながら西には、自らが人生の終わりに来ているという、ハーディ自身の死に対する強い意識が反映されているように思われる。このような象徴的意味付けがなされていると思われるハーディの西の旅を以下順に追って行くこととしたい。

1 最初の旅

ハーディとエマとの最初の出会いは1870年3月7日のことであった。その日教会修復の仕事で彼はコーンウォール、セント・ジュリオット (Saint Juliot) に出かけ、そこでエマとの運命的な出会いをする。この出会いはよく知られている 'When I Set Out for Lyonesse' という詩に表されている。詩の中で使われている 'magic' という言葉が旅の目的地の雰囲気と、そこで出会った女性の魅力を象徴的に表している。

When I set out for Lyonesse,
 A hundred miles away,
 The rime was on the spray,
 And starlight lit my lonesomeness
 When I set out for Lyonesse
 A hundred miles away.

What would bechance at Lyonesse
 While I should sojourn there
 No prophet durst declare,

Nor did the wisest wizard guess
 What would bechance at Lyonesse
 While I should sojourn there.

When I came back from Lyonesse
 With magic in my eyes,
 All marked with mute surmise
 My radiance rare and fathomless,
 When I came back from Lyonesse
 With magic in my eyes!

表題に使われている Lyonesse はコーンウォールにあったと伝えられている伝説上の地名で、アーサー王誕生の地である。この詩では、この旅のことを時空を越えた伝説の地への旅として詩人は表している。詩全体にこの伝説上の地名が神秘的な雰囲気を作り出している。まだ闇に覆われた早朝、霜が降りた木々、満点の星、百マイル彼方の旅の目的地。そしてそこで一目でエマに魅了されてしまった詩人は「目に魔法の光を宿して」(With magic in my eyes!) 帰ってくるのである。

エマとの出会いは彼の人生の大きな転機となった。この魔法の力は彼の創作活動にも乗り移ったようだ。1870年代は伝記的に見れば、ハーディの人生の中で最も勢いのある、光輝く10年間であった。この時期の彼は小説家としての本格的な活動を始め、*Desperate Remedies* (1871), *Under the Greenwood Tree* (1872), *A Pair of Blue Eyes* (1873), *Far from the Madding Crowd* (1874), *The Return of the Native* (1878) 等の長編小説を次々と出版し、特に *Far from the Madding Crowd* は彼の最初の成功作となった。このような充実した仕事は同じように充実した精神状態から生み出されたと言える。先にも述べたように、彼は1870年にエマとの運命的な出会いをし、激しい恋愛期間を経て1874年に結婚している。作家としての現実的な成功と理想的な愛を獲得した、まさに彼の人生の中の絶頂期とも言えよう。

'In Seventies' はこのような1870年代(ハーディの30歳代)、彼が最も心身共に力みなぎっていた時代を回想した詩だと思われる。この時代、詩の語り手は彼の胸の中にしっかりと囲われた「仕事の時も、休息の時も、魔法の光を投げかける星のように輝く数々の想い」を持っていたと言っている。

In the seventies I was bearing in my breast,
 Pinned tight,
 Certain starry thoughts that threw a magic light
 On the worktimes and the soundless hours of rest
 In the seventies; aye, I bore them in my breast
 Pinned tight.

この 'Certain starry thoughts that threw a magic light' という一行はハーディ独特の表現で、遠い過去の伝説、あるいは神話と結びついていく。それは何か信じがたいような、魔術にで

も取りつかれたような、1870年代の彼の旺盛な創作活動とその原動力となったエマとの愛の燃焼を表しているように思える。

2 再 訪 の 旅

エマ夫人は1912年11月27日の朝、心臓発作のために72歳で急死した。それまでの約20年間表向きは夫婦という体裁は保っていたものの内実は極めて疎遠な関係で、彼らは互いに疎んじ憎しみ合っていたということである。当時、ハーディは二階に、エマは三階の屋根裏部屋に寝起きして、その朝、彼女の世話をしていた若いメイドが彼女の容態の急変を告げ、ハーディがエマの部屋に入ったときはすでに彼女は意識不明の状態になっていた。

よく知られている通り 'The Going' という詩はエマ夫人の死を表したものである。近くにあるものには関心を示さず、手の届かない遠くにあるものに憧れを抱く。あるものを喪失して初めて喪失したものが自分にとっていかに大切なものであったかを自覚し、失ったものを激しく求めようとする。この詩にはハーディのこのような感性、しばしばロマンティック・アイロニーと呼ばれている感性が示されているように思う。ある意味では、健全な感性とは言えないという、T.S.Eliot の批判を受けても仕方がないところであろう。³⁾

この詩で彼の悲痛の原因は彼自身にある。つまり妻の死を全く予見できなかったこと。ゆえに同じ屋根の下にいながら妻の死に立ち会うこともできず、長い間の不和に対して何の和解の言葉もかけてやれず、妻を死なしてしまったということである。

Never to bid good-bye,
Or lip me the softest call,
Or utter a wish for a word, while I
Saw morning harden upon the wall,
Unmoved, unknowing
That your great going
Had place that moment, and altered all.

彼の脳裏に甦ってくるのは二人が知り合って間もない頃の、コーンウォール北岸の大西洋に突き出たビーニィの断崖の上を颯爽と馬を走らせる彼女の姿であった。

You were she who abode
By those red-veined rocks far West,
You were the swan-necked one who rode
Along the beetling Beeny Crest,

'red-veined' には青春の血潮が、'swan-necked' には青春の清らかさが込められているように思う。このようにして始まった恋愛を冷却させたのは、彼女の青春の息吹を枯らし一生を台無しにしたのは自分ではないかと、ハーディは自己を告発している。壊れた関係を修復するための十分な努力がなされなかったのではないかという想いが彼の胸に迫っている。そしてこの二人の愛が

始まった思い出の場所をどうして二人一緒に再訪しなかったのかと慚愧の思いに駆られている。

And ere your vanishing strive to seek
That time's renewal? We might have said,
 'In this bright spring weather
 We'll visit together
Those places that once we visited.'

恐らく自己に対する糾弾と妻に対する償いの気持ちから、ハーディはコーンウォール再訪の旅へと旅立ったものと思われる。⁴⁾

ハーディはエマが亡くなってから四ヶ月後、彼が初めてコーンウォールを訪ねてから43年ぶりにセント・ジュリオットに向けて旅立っている。

愛する女性の死の悲しみの大きさを表すために、世界が解体するというコンサートがエレジーではしばしば使われたように思うが、'A Death-Day Recalled' という詩では、自然は一人の女性の死になんら影響を受けることなく、昔同様何事もなかったように平然と存在している。ハーディの心情と、彼が再訪した昔の懐かしい思い出の地との間にまだ精神的距離感があるようだ。そのことにハーディは苛立っているように見える。再訪した土地の情景と精神的な一体感が得られないことに、あるいは過去の時間が呼び戻され、過去の世界が広がっていかないことに苛立ちを感じているように見える。

Beeny did not quiver,
 Juliot grew not gray,
Thin Vallency's river
 Held its wonted way.
Bos seemed not to utter
 Dimmest note of dirge,
Targan mouth a mutter
 To its creamy surge.

Beeny Cliff は、コーンウォール北岸のペンタガン入江に向かって突き出た断崖で、エマを追慕した詩の中では最も多く背景として選ばれている場所である。激しく揺れる大西洋の海を背景にしてエマが最も美しく輝き、ハーディの彼女に対する想いが最も純粹であった忘れがたい場所であったようだ。一連の Beeny Cliff を背景にした詩の中では、'Beeny Cliff March 1870-March 1913' が最も優れているように思われる。

この詩の最初の3連は彼らの恋愛が始まった頃、人生が最も美しく輝いていた時、つまり March 1870、後半2連が43年後の現在、亡き妻を追慕するためにこの地を再訪している現在、つまり March 1913 のことを表している。当然のことながら過去は美化され、理想化されて描かれている。第一連では、その後ハーディがエマを理想化して描く時のパターン化した表現となるが、真珠やサファイア色に輝く波高い西の海から吹き付ける風に褐色の髪をなびかせ、激しく波が打ちつける断崖の上で颯爽と馬に跨る若き美女が描かれる。一種の時空を越えた神話空間を

ハーディは作り出そうとしているかのようである。⁵⁾ その時エマは、詩人が心から愛し、また詩人のことを忠実に愛した女性であった。

O the opal and the sapphire of that wandering western sea,
And the woman riding high above with bright hair flapping free -
The woman whom I loved so, and who loyally loved me.

そして晴れ渡った3月のその日に、二人は心も軽く高らかに笑い合った。

As we laughed light-heartedly aloft on that clear-sunned March day.

特に第3連の Beeny Cliff から眺望したコーンウォールの海の描写は美しい。その時天候は一転して通り雨となる。しかしそれは虹色に輝く雨（希望の象徴）であった。大西洋の海原は一瞬灰色の醜い色になるが、すぐに陽が射ってきて、また紫色に美しく輝き始める。一瞬空がかき曇ってもすぐに陽が射してくるという天候の回復に、青春の愛の力強さが象徴されているように思われる。

A little cloud then cloaked us, and there flew an irised rain,
And the Atlantic dyed its levels with a dull misfeatured stain,
And then the sun burst out again, and purples prinked the main.

‘dye’（染める）、‘prink’（化粧する）という二つの動詞は、その後の二人の結婚生活の中で、ハーディがすべきことであったのに何もしなかったことを暗示しているように思われる。このように美しく始まった愛を、その後の結婚生活の中で醜くしてしまったのはハーディ自身ではなかったか。彼らの壊れた愛は現実においては最後まで修復されなかった。ゆえにこの再訪の旅は、もう手遅れであるとは分かっている、もう一度心の中で愛を修復し、美しく飾ることはなかったか。彼は教会修復の仕事で、初めて彼女に出会っている。その時の仕事は老朽化した建物を修復することであった。今は壊れた心を修復しようとしているのではないだろうか。

後半の2連は現在の海辺の情景である。過去はただ心の中に甦ってくるだけである。彼女はもうどこか「別の場所」(elsewhere) にしかいない。現在は見るものの主観とは全く無関係にただの自然として存在している。エレジーの典型的な形に倣って、この詩も過去を取り戻すことはできないという痛みを実感することで終わっている。

What if still in chasmal beauty looms that wild weird western shore,
The woman now is - elsewhere - whom the ambling pony bore,
And nor knows nor cares for Beeny, and will laugh there nevermore.

だが、この痛みを鋭く実感することこそハーディのこの旅の目的ではなかったか。大切なことを大切なこととして実感することも許さず、ただ衰退へと生命を導く「時の嘲り」(Time's derision) に対する彼の抵抗ではなかったか。⁶⁾ この「時の嘲り」から来る精神的麻痺状態から脱出す

ること、人間であるための痛みを実感することが彼の旅の目的であったとするなら、この場所で彼はその目的を果たすことが大いにできたと言えないだろうか。

次に 'At Castle Boterel' という詩を見てみよう。Castle Boterel の実際の地名は Boscastle で、43年前エマがハーディを案内した風光明媚な丘陵地帯である。この詩はハーディがコンウォール再訪で得た収穫（恐らく彼が得た最も重要な意味）を表していると思われる。それは馬車で思い出の地を通過しているとき、予期せず彼の心に溢れた感慨であった。この旅の目的は43年前の過去の意味を問い直す旅であった。これまでの思い出の地は懐かしさだけでなく失望も与えたようだ。43年という時の経過が「過去の痕跡」をかき消していた。何か期待はずれに旅も終わってしまうかに思われた頃、ふと馬車の窓から通りすがりに見たこの地の情景が彼に多くのものを与えてくれたようだ。

霧雨の中詩人が馬車に乗って公道と小道の交差点まで来て、霧で霞んだ脇道を振り返ると、濡れて光る斜面の上にはっきりと、(43年前の) 晴れ渡った3月、夕闇に包まれた彼自身と一人の女性の姿を彼は見る。43年前、彼ら（ハーディとエマ）はこの坂にさしかかって、彼らに乗せた馬車を引く馬が苦しうに速度をゆるめたとき、馬の負担を軽くするために馬車から降りて、帰宅が遅くなるのも気にせずに丘を登っているのであった。

As I drive to the junction of lane and highway,
And the drizzle bedrenches the waggonette,
I look behind at the fading byway,
And see on its slope, now glistening wet,
Distinctly yet

Myself and a girlish form benighted
In dry March weather. We climb the road
Beside a chaise. We had just alighted
To ease the sturdy pony's load
When he sighed and slowed.

今詩人がさしかかった「交差点」(junction) は、現在から過去への交差点として象徴的な働きをしていると思われる。同時に辺りの情景をぼんやりと霞ませている霧雨も、現在にヴェールをかけ、過去を浮かび上がらせる、又は幻想世界へと誘う象徴的働きをしているようだ。そこに浮かび上がってきた43年前の若いカップルは、時間の制約に捕らわれることなく、馬への思いやりという気持ちの純粹さに基づいて行動している。平凡な丘、平凡なカップル、そしてただ平凡に丘を登っているに過ぎない彼らの行動、だが詩人は何気ない平凡な過去の情景からある重要な真実に覚醒する。

彼らがその時坂を登りながら何をしたか、何を話したか、またそのようなことが一体どんな結果になったのが重要なことではなくて、希望がある限り、人間としての感情を失わない限り、人の人生は決して妨害されることのない「何か」(something) を持っているということこそ、重要なのである。その何かを若いカップルはその時実感していたし、そして43年の時の経過を経た今、この何か、彼が旅の中で無意識のうちに求め続けてきたと思われるこの何か、詩人の心

に甦ってきたと言える。

What we did as we climbed, and what we talked of
 Matters not much, nor to what it led, -
 Something that life will not be balked of
 Without rude reason till hope is dead,
 And feeling fled.

その何かはほんの一瞬を満たしたに過ぎなかった。だがそのような崇高な瞬間は後にも先にもこの丘の歴史の中で一回限りであったし、その後何千人もの多くの人がこの丘を登って行った中でこのような瞬間は二度と起こらなかったと詩人は断言している。

It filled but a minute. But was there ever
 A time of such quality, since or before,
 In that hill's story? To one mind never,
 Though it has been climbed, foot-swift, foot-sore,
 By thousands more.

さらに詩人は続けて、時間は容赦なくこの大事な光景を視野から消し去ってきたが、詩人には43年前のあの晩と同じように、若き日のエマの幻が丘の斜面に残っているのが見えると断言している。特に 'remains' という言葉が端的に示すように、彼は旅の目的であった「昔の情熱の名残」(Veteris vestigia flammae - Traces of old flame)を見つけることが出来たのであった。

And to me, though Time's unflinching rigour,
 In mindless rote, has ruled from sight
 The substance now, one phantom figure
 Remains on the slope, as when that night
 Saw us alight.

だが、今彼が感じている感慨もやはり一瞬だけのもので、同じように時間に消されていくものかもしれない。だがたとえそうであってもこの甦った一瞬の重要性が損なわれることは決してないように思われる。

最後にもう一つ 'St Launce's Revisited' という詩を見てみよう。

1870年代の初めの頃、コーンウォール行きは鉄道はローンストーン(セント・ローンセズはハーディのつけた仮名)が終点になっていて、彼が初めてこの地方を訪れたとき、彼はここから馬車を雇ってセント・ジューリオットに向かったのである。つまり旅の始まりの地であった。43年後の実際の旅の行程がどうであったのか不明であるが、*Poems 1912-13* の作品オーダーに従えば、今回は最後に訪れていることになる。

'Slip back, Time!' という詩の冒頭の一行に明らかに示されているように、今思い出の駅に近づきながら、彼は強引に過去を呼び戻そうとしている。しかし彼の期待は外れる。43年ぶりに訪

れた地はすっかり変わっていて、見知らぬ土地のようである。初めて訪れたとき雇った馬車の御者とその時の馬はとうに死んでいる。宿屋の主人も、女給も新しい人になっている。過去は容易には戻ってこない。

Groom and jade
Whom I found here, moulder;
Strange the tavern-holder,
Strange the tap-maid.

43年という時の経過が過去の名残をかき消そうとしている。このような想いが二度繰り返されている 'strange' に込められているように思える。一瞬の幻想、夕闇迫る頃ハーディが旅立っていったこの地から、あの時と同じように大西洋の海辺の町へと急いでいけば、エマと彼女の家族に会えるかもしれないという、センチメンタルな幻想が詩人の脳裏をかすめる。

If again
Towards the Atlantic sea there
I should speed, they'd be there
Surely now as then?...

だがこの幻想はすぐに詩人自身によって否定され、消されてしまう。確かに下降調の詩ではあるが、旅の始まりの頃の詩に溢れていた悲痛は感じられない。激しい感情の波の過ぎ去った後の余韻を詩人は平静に受けとめようとしているように思われる。

3 旅 の 後

'She Opened the Door' という詩はハーディの生前に出版された詩集の中の最後の詩集 *Human Shows, Fair Phantasies* (1925) に収められたものであり、エマへの一連のエレジーが載せられた *Satires of Circumstance* (1914) からは約10年の時が経過している。ゆえにこの詩ではハーディは冷静な調子で、エマが彼にしてくれた役割を回想している。彼女は彼に四つの扉を開いてくれたと詩人は言う。四つの扉とは順に「西への扉」(the door of the West), 「ロマンスの扉」(the door of Romance), 「愛の扉」(the door of a Love), 「過去への扉」(the door of the Past) である。この詩の中にハーディとエマの愛の軌跡が空間的象徴と、時間的流れの中で明瞭に表現されている。この時ハーディは83歳で死の3年前であった。重複するところもあるが、この詩を通してこれまでのハーディの旅を再整理してみたい。

1870年3月早朝、彼は教会修復の調査のために、コーンウォール、セント・ジュリオットに旅立つ。長い旅の行程の後にやっと彼は夕闇に包まれた潮騒の鳴り響く海辺の町の教会にたどり着くが、その時疲れた旅人にドアを開けてくれたのはエマであり、これが二人の最初の出逢いであり、愛の始まりであった。

She opened the door of the West to me,

With its loud sea-lashings,
And cliff-side lashings
Of waters rife with revelry.

また彼の作家としての創作活動の始まりを激励し、支えてくれたのも彼女であった。彼自身のそれまでの閉ざされた世界、彼自身の独房 (cell) から彼を夢の世界、理想の世界へと解き放ってくれたのは彼女であった。

She opened the door of Romance to me,
The door from a cell
I had known too well,
Too long, till then, and was fain to flee.

彼女は現実世界の動乱を通り抜けて、青空が緑の草原と一つになり消えていく遙かかなたまで続く愛の世界のドアを開いてくれた。

She opened the door of a Love to me,
That passed the wry
World-welters by
As far as the arching blue the lea.

そして今彼女は自分の死により過去の世界のドアを開いてくれる。「前に見るべきものはほとんどないから」という最後の一行の虚無感は打ち消しがたいが、過去の世界とはかならずしも消極的世界ではない。それは神秘的な力を持ち、広大な拡がりを持つ世界である。特に「魔法の光」という表現はアーサー王伝説の地コーンウォールへと我々の連想を導く。ここにはキリスト教的考え方に基づくのではなく、神話的な枠組みの中で生命の再生が表されているように思われる。

She opens the door of the Past to me,
Its magic lights,
Its heavenly heights,
When forward little is to see!

この詩の4つの連は彼とエマの愛の始まりからエマの死までという二人の愛の進展を時間的順序で表しているが、第4連の過去の世界はまた第1連のコーンウォールという西の世界に自然に帰っていき、全体として円環、あるいは循環構造を形成していることになり、愛の永遠性が構造的に表されていると言える。

Notes

本文中の引用はすべて以下の版による。ページ数は略す。

James Gibson ed. *The Complete Poems of Thomas Hardy* (London and New York: Macmillan London Ltd., 1976)

- 1) 一例を挙げると 'Preface to *Poems of the Past and the Present*' の中でハーディは次のように言っている。'Of the subject-matter of this volume - even that which is in other than narrative form - much is dramatic or impersonative even where not explicitly so.'
- 2) Andrew Motion は彼の編集した詩集の Introduction で次のように言っている。'His strongest affections were only aroused when people were dead, things were distant, and desires could not be fulfilled. Inevitably, this leads to the conclusion that Hardy's best poems are in their various ways all elegies, and that the best of these best are the poems to Emma.' Andrew Motion ed. *Thomas Hardy Selected Poems* (London and Vermont: The Guernsey Press Co. Ltd., 1994) p. 35
- 3) T.S. Eliot, *After Strange Gods* (London and New York: Faber and Faber Ltd., 1933)
- 4) 'He went on penitential pilgrimages to the places where she had lived, and scores of reminiscential poems were written in which the author's love and remorse found cathartic expression.' F.B. Pinion, *A Hardy Companion* (London and New York: the Macmillan Press Ltd., 1968) p. 351
- 5) 藤井繁, 『晩鐘 トマス・ハーディの詩』(東京:千城, 1990) p. 401
- 6) 'After a Journey'

(1998年5月8日受理)